

# 松浦道夫先生をお送りする

人間科学会会長 梅 山 秀 幸

松浦先生，どうも御苦労さまでした。

『人間科学』の月号は，松浦道夫学長の退職記念号とさせていただきます。

本学の第一期生としてご入学され，以来半世紀を桃山学院大学とともに歩んでこられた松浦先生のご功績に対して，新たに転任してきて本学における日の浅い小生が，代表して送別の辞を記すことは，永年幾星霜にわたって松浦先生とともに苦楽を共にしてこられた先学の諸先生方および事務職員の皆様をさしおいて，さしでがましい思いもいたします。しかし奇しくも小生が，本年度の人間科学会の会長をおおせつかりましたことをご縁として，僭越ながら，送別の辞を記させていただきます。

松浦先生は，本学の経済学部一期生として入学後，ウエイトリフティングの選手として活躍されました。本学をご卒業後，すぐに本学経済学部副手に就任される一方，国立大阪学芸大学（現，大阪教育大学）において体育学を学ばれました。さらにその後，今日に至るまで，法人理事・法人評議員・大学評議員・一般教育部長・就職委員長および学長など，さまざまな本学の要職に就かれ，桃山学院大学の運営に大きく貢献し，ご活躍されました。

昨年11月，桃山学院創立125周年，桃山学院大学開学50周年記念式典が行なわれました。そこには，はるばる英国国教会よりカンタベリー大司教の御臨席をいただきました。本学キャンパスで行なわれた記念式典において，松浦学長が，「私が50年前に本学の第一期生の学生として開学式にカンタベリー大司教を眼前にお迎えできた感激を思い起こしました。再び50年後の今日の記念式典にカンタベリー大司教を，学長として桃山学院大学にお迎えできたこと

は感激に堪えません。」とごあいさつされましたことは、出席者一同の深く印象に残るところです。

松浦先生は、運動生理学・体育学・体育教育・社会スポーツ・スポーツ史について、広範な数多くの研究をご発表されました。そこには、本学の体育関係の教員だけではなく、大阪府立大学の先生方なども交えて、さまざまな共同調査・研究を展開してこられました。そのような共同研究の企画運営にあたって、松浦先生は特にスポーツマンとしてのリーダーシップを大きく発揮してこられました。

また松浦先生は、学内の会議においては、「大学における体育は旧来の学校保健体育科教育の延長にあるべきものではなく、これからは健康・スポーツの実践でなければならない。」ということをも、常々主張していらっしゃいました。そのご提案を受けて実践されたカリキュラム改革後の「健康・スポーツ学演習」においては、さらに多彩で充実した種目が提供され、休暇中の履修予備登録の手続き時においては、教務課の前に学生の長蛇の列ができる大人気の科目となっております。

さらに松浦先生は、永年にわたって数多くの運動部のコーチや顧問などを歴任され、体育会の現役の選手の指導や面倒をよく見られました。今日の桃山学院大学の体育会や各運動部が、さらに自由で明るく開放的なイメージで発展しつつある姿は、松浦先生のお人柄を反映したものと云えます。そして、各運動部のOB・OGとの卒業後の交流を大切にされ、桃山学院大学同窓会の運営・発展にも大きく力を尽くされました。

現在、真新しい聖ヨハネ館のガラス張りの窓が夜も煌々と光り、中では実にさまざまな国々からの留学生が日本人学生と集う姿を見ることができます。キャンパスの国際化が松浦学長のもとで飛躍的に進んだことは否定しようのない事実です。一度、ウィーン大学のセップ・リンハルト教授を囲んで、松浦先生と席を同じくする機会がありましたが、先生の話題の豊富さとホスピタリティには瞠目させられました。スポーツという普遍的な言語を通して培われた国際性というものがあるのだと、そのとき認識しましたが、近年の桃

山学院大学の国際化は、先生のそのような国際性抜きでは考えられないものだと思います。

五十年ちがい教員歴ともなると、先生の警咳に接した卒業生はけっして幾万を下回ることはないのではないのでしょうか。伝教大師最澄は『山家学生式』の中で、「国宝」とは何をいうのか、それは宝石でも真珠でもない、学ぶ心をもった学生なのだといえます。私たち教員はその宝を磨く使命を帯びているわけですが、なかなかその使命を果してはいません。しかし、松浦先生は、あの温厚なまなざしで見つめながら、時には仁王さまのように叱咤しながら、ご自身の後輩でもある学生たちを育て上げ、今では幾万を数えるその教え子たちが社会の隅々を光輝かせて貢献していることになります。

文と武ということがいわれますが、その両立はなかなかできるものではありません。「人は、何百、何千億以上の細胞によって構成され、細胞相互のバランスにより、みずからの意志をもって自由に独立して行動しうる個体なのである。」というのは、松浦先生の1988年の論文の中にある箴言ともいってよいものですが、そこでは、こう続けていらっしゃいます。

「人体は、適度な刺激によって適応力を増し、その機能は向上し、その構造や形態も変化する。しかし、使用しなければ、組織や器官の退化や萎縮と同時に機能低下をももたらす。もちろん、過度の使用や刺激は故障や疾病の原因となる。この原則は精神活動にもあてはまる。すべての生物と同様に、人間も生存していくうえで、つねに、肉体的・精神的ストレスを受けている。これに適応し、乗り越えることによって人間は成長する。適度なストレスは、精神活動や性格形成上欠くことのできないものである。」（「生きていることの生理学的仕組み」）

この箴言を、私達は深く肝に銘じていなくてはなりません。

いずれにしろ、これまでの桃山学院大学の歴史そのものであった松浦道夫先生の後に、私たちは新たな桃山学院大学の歴史を築き上げなくてはなりません。先生への饞としてお礼の気持ちをこめてこのささやかな論集を捧げたいと思います。

2010年3月1日